本を選ぶ

高校図書館版

NO.75 2023年（令和5年）5月20日
https://www.las2005.com

●発行／ライブラリー・アド・サービス
〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

ろん・ぽわん

アルプス

Mくんとは、ごくまれに図書館で話す機会もあったが、それより部活の仲間だったので週に何度か顔を合わせていた。特に仲がいいと言うほどでもなかったし、彼はもともと口数の少ない人で、会っても“やあ”とか“ああ”とかしか言わない。

ところがそのMくんが夏休みに山に行こうよ、と言い出した。一瞬戸惑ったが、行きたいねと応じたものの初心者向けの山じゃつまらないし、と言って経験のない1年生がそれなりの候補を並べられるはずもない。どんな計画にするかは山の雑誌や本を参考に考えるとしてその日は解散した。

月刊誌『アルプ』は串田孫一をはじめとして尾崎喜八、深田久彌、畦地梅太郎、内田耕作らが同人となって主に山岳をテーマにする小さな文芸雑誌である。まずは学校の図書館で調べたものの当然蔵書にはない。当時、学校の図書館に雑誌は数えるほどしかなかった。誌代は高校1年生にはかなり負担だったが、ためらいはなかった。近所の小さな本屋のおじさんは淡々と注文を受け付けて、最新号の入荷の期日を小さな紙に書いてくれた。心待ちにするという気分はこういうものかと思いながらその日を待った。

そもそもワンゲルに入部したのも串田孫一の『山のパンセ』(実業之日本社/1957)を読んだのがきっかけだったように思う。雑誌『アルプ』は、1958年に創刊して1983年に終刊となるまで誌面は山を思索の対象とする哲学的な随筆や詩、画家による画文などで毎号70頁ほどを埋める。雑誌というよりは同人誌の趣だった。一方で登山に関してなら『山と渓谷』や『岳人』という実用性の高い雑誌から登山ルートの紹介や用具についても多彩な情報が得られる。『アルプ』は山にあこがれをもつ十代に何かを与えてくれる雑誌だったかも知れないが、周到な準備を重ねて高い山に登るには、後者は欠かせない。

北アルプスをめざすのは早すぎる、急峻な岩場のコースが多いし、山小屋も少ない。結局、難しいルートを避ければ山は奥行きがあるけれどなんとかなりそうな南アルプスに決めた。若い二人はとにかくアルプスという名に強く惹かれていたのだと思う。

その年は梅雨が長引いて夏休みに入ってもなかなか明けなかった。ラジオに首っ引きでNHK第二放送の気象通報から天気図を引く毎日だった。7月末になって漸く山に入った。晴天が続き、二人はついに標高3193 mの北岳山頂に立った。深い山を登りつめて初めて見る雲海の上からの眺望はまさに心躍る高揚感をもたらした。

だが下山ルートは思いのほか苦戦した。麓の山が幾重にも連なり、なだらかな下山道は果てしなく続いていた。途中、気まずそうにMくんが不調を訴えた。熱中症だった。何とか里にたどり着いたころにはかなり暗くなっていた。けもの道に迷い込まず無事に下山できたのは幸運だったし、この計画に無理があったのだと二人は思い知った。（埜村太郎）

子ども？　それとも大人？
－ 10 代の今と未来を支える本

木谷 陽平・植松 由記

世の中には、とても難しそうな本もあれば、とても易しそうな本もある。日本評論社という出版社で働く私たちは普段、「とても難しい本」に比較的近いところで、編集の仕事をしている。

「難しい本」を書くのも読むのも、難しいことを知っている人、つまり「専門家」が中心である。専門家が専門家に何かを伝えていることになる。

そうした本の編集に携わっていると、時々、「こんなに大切なことなら、自分自身が子どもの頃に知りたかった」と感じることがある。そうした思いに駆られて企画したいくつかの本を、ここでは紹介してみたい。

子どものための教育哲学

対人援助職向けの『こころの科学』という雑誌で、特別支援教育をテーマに特集を組んだことがあった。そこで苫野一徳さんという若い研究者に執筆を依頼した。教育哲学を専攻されており、一見して対人援助とは関係が薄そうだが、総論として「教育の『本質』からみた特別支援教育」の項目を加えようと考えた。

いただいた原稿には、「公教育という営みがあるのは何のためで、なぜそれがなくてはならないのか」ということが、人類の歴史と西洋哲学の議論を踏まえて書かれていた。私はこれを読んで少なからずショックを受けた。なぜなら、そんなことは今まで誰も教えてくれなかったからである。学校に通うことがつらく、できれば行きたくなかった私にとって、学校というものが存在する意味を子どもの頃に知っていたら、何かが違っていただろうと思えた。

当時、苫野さんは早稲田大学の非常勤講師をされていた。大塚にある日本評論社からは都電に乗ってすぐの距離だ。さっそく会いにいった私は、「先生の専門である教育哲学のエッセンスを中高生にも知ってもらえるような、そんな本を書いてもらえないでしょうか」とお願いした。苫野さんは「やりましょう」と即答してくれ、そして出来上がったのが『勉強するのは何のため？』（2013 年）という本である。

幸いなことに本書は多くの読者を得て、刊行から 10 年経った今もよく読まれている。本書を題材とした読書会に呼んでいただく機会があったが、参加者たちは「学校に行く意味」「学ぶ意味」を活発に語り合っていた。編集担当としては手前味噌になるが、「勉強」の当事者である生徒たちが、考え対話するきっかけになる力をもった本だと思う。

知っていることが自分や大切な誰かの力になる

『こころの科学』の編集を長く続ける中で、こころを病むことになった人に対して、もちろん精神医療やカウンセリングの意義を否定するものではないが、心理的な支援だけでなく、経済的な面や生活の基盤を支えるようなサポートがあれば、それだけでこころの不調が和らぐこともあるのでは、とふと考えることがあった。よく見聞きする生活保護制度以外にもたくさんの社会保障制度があることは知っていたけれど、その制度は専門的かつ複雑で、しんどい状況に置かれていても手に取れる、平易に書かれたものは見つけられなかった。生きのびるための知恵ともいえる社会保障制度にもかかわらず、中学３年生の公民でサラッと触れられる程度で、いざ自分がピンチに陥った時に使えるものとしては教わらない。こんなに大切なことなら、子どもの頃に教えてほしかったし、自分の子どもにも知ってもらいたいと切に思った。

『15 歳からの社会保障』（2022 年）の執筆をお願いした社会福祉士の横山北斗さんは、医療機関で患者家族への相談援助業務に従事したのち、NPO 法人を設立している。社会保障制度の申請

主義に問題意識をもつ方で、小児がんサバイバーでもある。もともとはロジカルで説得力に富む筆致の方だったが、柔軟なお人柄に助けられ、中高生に届けるための意見交換を重ねた。結果的に、10 ～ 40 代の登場人物のストーリーを通して、人生で誰もが出会いうるピンチ――怪我をしたりハラスメントにあったりして働けなくなること、高校生で妊娠すること、家族から暴力を受けること etc.――に対して使える社会保障制度を易しく紹介する一冊になったと思う。

申請主義を解決する魔法の杖は存在しないだろう。若い人たちは、もし困った時にはどうか周りに「助けて」と声をあげてほしい。けれど、自分自身がその立場に置かれたら、簡単に「助けて」と言えただろうか。「そういえば、あの本に今の状況を切り抜ける制度について書いてあったっけ……」と思い出してもらえたら、こんなに嬉しいことはない。

子どもと大人は違っていい

はじめから若い読者を意識していたわけではないが、結果的に、10 代に届けたいと思える内容に仕上がった本も紹介しておこう。森口佑介さんの『子どもから大人が生まれるとき』（2023 年）だ。子どもには子どもの世界があり、それは大人と違うものだが、違うことにこそ意味がある――本書には、そんなメッセージが込められている。

森口さんは発達心理学や発達認知神経科学を専門とする研究者で、以前から『こころの科学』を通じて少しだけお付き合いがあった。「発達」なので、子どもに関係するテーマに取り組まれているわけだが、論文などはやはり素人にはハードルが高い。しかし、その研究内容は研究者以外にも知ってもらう価値がある。漠然とそんな気がしていた私の頭に降ってきたのが『子どもから大人が生まれるとき』というフレーズだった。幸い、森口さんもこのフレーズを面白がってくれ、雑誌連載を経て書籍化が実現した。

子どもと大人の「意味ある違い」とはどんなものか。たとえば大人は、自分自身をある程度客観的にみることができる。自分の得意なことや苦手なことをよく知っている。だから苦手分野には最初から手を出さない。いっぽう子どもは、自分を客観視することがうまくできない。しかし子どもにとってはそれが大切である。たとえば初めて自転車に乗る練習をするとき。こけるとわかっている大人は躊躇するかもしれない。子どもは「怖いもの知らず」だからこそ、果敢にチャレンジすることができるのだ。

子どもと大人は違ってよく、むしろその違いを大切にしたい。本書のメッセージが、中高生たちのありのままを肯定し、勇気づけることになれば嬉しい。

本という支え

日本評論社には他にも 10 代向けの本として『[新版] 14 歳からの精神医学』（宮田雄吾著、2021 年）があり、ロングセラーになっている。

今や 18 歳は法律的には立派な「大人」である。とはいえ、10 代は大人と子どもの間で揺れているというのがフェアな見方だろう。そうした時期には多くの支えが必要だが、その中で本に果たせる役割があるかもしれない。そんなことを時々考えながら私たちは仕事をしている。

（きたに ようへい・うえまつ ゆき：日本評論社）

本でつながる世界への扉

―― 学校図書館における多文化サービスについて――

長沼 祥子

近年、外国にルーツを持つ生徒の数が増加傾向にあります。文部科学省が行っている「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和３年度）」によると、平成 20 年度に比べ、令和３年度はその生徒数が約 2.7 倍となっていることがわかりました。

私が勤務している埼玉県立妻沼高等学校は、埼玉県熊谷市にある普通科高校ですが、インターナショナル化が進む群馬県大泉町が隣接している地域であり、外国にルーツを持つ生徒が一定数在籍しています。埼玉県は、一部の県立高校へ日本語指導や教育相談等の支援を行う日本語支援員を派遣しており、本校にも支援員が派遣されています。また今年度から、文部科学省が定めた外国にルーツを持つ生徒に対して、高校での日本語指導を卒業単位として認定する制度が開始されます。このように学校教育の中でこれらの生徒への対応が進むなか、学校図書館においても、多文化サービスが求められるようになってきています。

多文化サービスとは

図書館における多文化サービスとは、民族的・言語的・文化的少数者（マイノリティ）を主たる対象とする図書館サービスのことです（『多文化サービス入門』日本図書館協会多文化サービス研究委員会　編／日本図書館協会／ 2004 年）。学校の場合、対象者は外国にルーツを持つ生徒となりますが、その内訳は外国人選抜の生徒や留学生、それらには該当しない日本語支援が必要な生徒、ALT（外国語指導助手）など様々です。学校図書館の多文化サービスで求められることとして、日本語学習への支援；日本語学習用資料の収集・提供などがまず挙げられると思いますが、その一方で、生徒が第一言語で読書をする機会や生徒のルーツとなる文化・言語を守る役割も大切であると考えています。

そのように考えるきっかけとなったのは、「朝読書用に、平仮名またはカタカナだけで書かれている小説が読みたい。」という生徒からのレファレンスでした。その生徒は、中国語を第一言語とする生徒で、平仮名・カタカナのみならなんとか読めるとのことでした。そこで、日本語学習者用の多読本を提供しましたが、その時気づいたことは、本校に生徒の第一言語の洋書がないということでした。朝読書の時くらい、第一言語；母語を読ませてあげたいと思い、少しずつ洋書を購入するようになり、現在は、英語・中国語・ベトナム語・ポルトガル語などの書籍を所蔵しています。生徒のアイデンティティでもある母語を守ることを意識して、生徒へ声がけをして積極的に多言語の書籍の提供を行っています。それは結果的に生徒が日本語を習得する手助けにもなると考えています。

つながりで可能性は∞に！

しかし、資料購入費が年々減らされている昨今、１つの学校図書館での対応には限界があります。そこで、足りない分は、埼玉県立図書館から相互貸借で借りています。特に県立熊谷図書館は、海外資料を積極的に収集しており、様々な言語の洋書や日本語学習用資料、雑誌やリーフレットなど、幅広い資料を提供しています。また、海外資料関係のレファレンスにも対応しており、様々な場面で助けていただいています。図書館同士でつながることで、サービスの幅を一気に広げられることが図書館の強みだと思います。

また、それは学校間でも同様です。他校の司書で、公共図書館勤務の経験から外国語版の図書館利用案内を生徒と共に作成する活動をされている方がおり、私もお手伝いをしてテンプレートを作成し、県内の高校へ提供しています。この図書館利用案内は、生徒へ多文化サービスを紹介する際の貴重なツールとなっています。このようなアイディアは、自分では絶対に思いつかなかったものであり、司書同士でつながることがいかに大切かを知る良

い経験となりました。

そして現在、他校でも多文化サービスのニーズが高まっているという声を聞く機会が増えたため、オンラインでの意見交換会を行うなど、積極的に学校図書館同士でつながる機会をつくっています。各々の学校で取り組んでいることを共有することで解決できることもあるからです。何より学校司書は基本的にひとり職場なので、困った際に相談する相手がいることは大変心強いものですし、サービスの向上にもつながります。さらに、今年度はご縁があり県立図書館と連携し、様々な言語の洋書貸出セットなど、学校図書館側のニーズに合わせた事業に取り組んでいく予定です。事業として残すことで、どの学校でも充分なサービスの提供を可能にすることが最終的なゴールだと考えています。

本でつながる世界への扉

最後に、多文化サービスはマイノリティだけではなく、我々日本人；マジョリティが多文化理解を深めるための機会をつくる側面を持つということも忘れてはなりません。グローバル化が進む現代において、身近にいる様々な人々と互いの文化や違いを理解し、尊重しあうことは必要不可欠なことです。図書館には、世界中の言語・文化・民族に関する資料が所蔵されており、それらは世界へつながる扉となります。司書は、利用者をその扉へ導く重要な役割を担っているのかもしれません。

（ながぬま しょうこ：埼玉県立妻沼高等学校司書）

汐﨑 順子 編

さまざまな分野の専門家が
子どもと読書について
「考えた」事典。
そして読者とともに
「考える」事典！

A5 版　496 頁
定価 9,900 円（本体 9,000 円）
ISBN978-4-254-68026-3

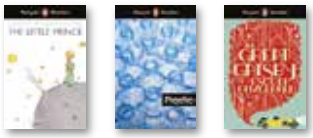
朝倉書店　東京都新宿区新小川町 6-29
〒162-8707 TEL03-3260-7631

株式会社　三善

PENGUIN社の多読教材
PENGUIN READERS

人気の古典・フィクション・ノンフィクションタイトルを
英語学習者向けにレベリングしたリーダー 全8レベル

セット販売　① 60冊 SET A
② 60冊 SET B NEW
税込 各￥62,700（本体各￥57,000）



Miyoshi　〒167-0032　東京都杉並区天沼 2-2-3
TEL：03-3398-9163　FAX：03-3398-9170

GEO PEDIA ペディア

最新ビジュアルが
豊富でよくわかる！

第2期 全3巻 7月刊行！
各巻定価：予価3,080円（税込）
株式会社 清水書院

ダイナミックな地球の営みを明らかに
来るべき国難級災害に備えて
なぜ生物は生き残れたのか？

教室を生きのびる
岡田憲治 政治学

かみ合わない学級会、むりやり感ある過半数ルール…。
学校という集団生活から社会のからくりを読みとく、
13歳からの<リアルな>政治学入門！　1870円

晶文社　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11
Tel 03-3518-4940　https://www.shobunsha.co.jp/

思春期の心と社会

メンタルヘルス時代の思春期を救え

小野善郎 ［著］

◎定価**1,760**円
四六判／並製／208頁　ISBN978-4-571-24103-1

思春期が絶滅の危機にある今、子どもたちのメンタルヘルスを守り支えるために、大人ができることとは。

心のなかはどうなっているの?

高校生の「なぜ」に答える心理学

日本青年心理学会［企画］　**若松養亮**［責任編集］
大野 久、小塩真司、佐藤有耕、平石賢二、三好昭子、山田剛史［編集］

◎定価**1,980**円
A５判／並製／244頁　ISBN978-4-571-23066-0

高校生の日々の悩みの正体を解説しつつ、心理学の基本的な考え方や青年心理学の主な領域を系統的に紹介。

福村出版｜〒113-0034 東京都文京区湯島2-14-11
TEL 03-5812-9702　FAX 03-5812-9705　https://www.fukumura.co.jp

34人の**哲学者・思想家・宗教家・文学者**の
思想をヒントに、私たちの人生について考える。

もういちど読む 山川倫理 PLUS 人生の風景編

Kotera Satoshi
小寺 聡

定価1,980円（税込）

2022年12月刊行　A5判 並製　304頁　ISBN:978-4-634-59128-8 C0012

山川出版社　〒101-0047　東京都千代田区内神田 1-13-13
https://www.yamakawa.co.jp/

君のクイズ

クイズプレーヤーの思考と世界がまるごと体験できる

生放送のテレビ番組決勝戦に出場した三島玲央は、対戦相手・本庄絆が、まだ一文字も問題が読まれぬうちに回答し正解し、優勝を果たすという不可解な事態をいぶかしむ。いったいなぜ、彼は正答できたのか?

著：**小川 哲**
定価1,540円（本体1,400円＋税10%）
NDC913／四六判／192頁／ISBN978-4-02-251837-8

朝日新聞出版

SDGsをさらに深く知り、考えるためにおすすめの書籍

渡邉 優 著

SDGs辞典

SDGsの17個の目標および169個のターゲットにつかわれている用語を徹底解説。
英語対訳付「SDGsが生まれるまで」など有益なコラムも！
英語教育にもおすすめの一冊。

A5判美装カバー218頁　2750円

ミネルヴァ書房　京都市山科区日ノ岡堤谷町 1
TEL075-581-0296 ※価格税込

とっておきの180冊を紹介します。

どう生きる? どう考える?
人生の岐路に立ったとき……
人間関係や勉強、仕事で悩んだとき……
将来に不安を感じたとき……
すべての迷いや悩みの答えが必ず見つかる。

齋藤孝先生が選ぶ

高校生からの

読書大全

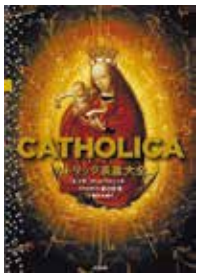
齋藤孝

定価 2,750 円（本体 2,500 円＋税 10%）
ISBN 978-4-490-21074-3

株式会社 東京堂出版　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-17
TEL 03-3233-3741　FAX 03-3233-3746

CATHOLICA
カソリカ

カトリック表象大全



スザンナ・イヴァニッチ 著
金沢百枝 日本語版監修

絵画、彫刻、建築、衣装、装飾、装身具などで彩られた、キリスト教・カトリック教会の視覚文化を一望する図鑑。

定価:4180円(税込)

東京書籍　TEL.03-5390-7531
FAX.03-5390-7538